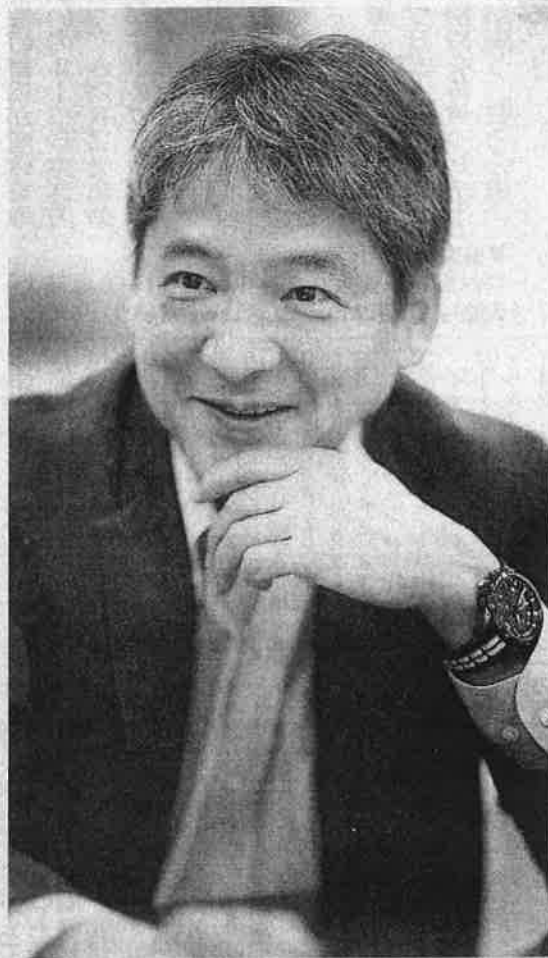


おやじ のせなか

怒りスイッチ 今ならわかる

「ITベンチャー」「イーパセル」社長

北野 讓治 さん



きたの・じょうじ 1962年、岡山県生まれ。早稲田大学卒業。2004年からITベンチャー「イーパセル」社長。2011年に米グループなどを相手取って米国で特許侵害訴訟を起こし、ライセンス契約に結びつけた。
|| 鬼室黎撮影

生まれてこの方、おやじに逆らったことがないんです。とにかく怒ると怖い。高杉良先生が僕をモデルに書いた小説「雨にも負けず 小説ITベンチャー」では穏やかなときの様子が描かれていたけど、喜怒哀楽が激しくて、怒ったら手をつけれない。善意や真心を傷つけてしまったとき、「怒りスイッチ」が入るみたいですわね。

高校受験の直前、ラジカセの横で勉強している僕を見て、おやじが新しいラジカセを買ってきてくれた。でも僕は「もったいねえなあ。なんでこんなの買ってきたん」と言ってしまった。おやじは「バカヤロー」とラジカセを投げつけ、床は傷だらけに。僕が真心を傷つけてしまったんです。

職場でのおやじは人望が厚かったです。れんが工場に勤めていて、職人たちが経営側と対立したときなんか、よく担ぎ出されて交渉役をやっていた。「おっつあん」と呼ばれ、家にもよく色々な人が出入りしてました。「おっつあん、実はなあ」と相談を受けるおやじはいつもより大きく見えましたね。

1浪して早稲田大学に入った頃、おやじの喜怒哀楽に「泣く」が加わった。帰省中の晩飯時なんか、昔話をしながらぼろぼろ涙を流した。六本木の花屋で深夜までアルバイトする息子が、おやじが幼かった頃の心象風景と重なっ

て見えたのかな。僕が東京に戻ると「もっと大切にしていりゃよかった」と泣いたこともあったとか。

おやじは1932年に福井県越前町で生まれて、10歳くらいの時に両親が離婚した。戦争が激化する中で、母親が再婚し、島根県で暮らしたこともあった。終戦直後に母、その後祖父、実父を相次いで亡くしている。周りを気にしない喜怒哀楽の激しさは、独りぼっちで自分を守って必死で生きてきた証しなのかもしれない。

おやじを怒らせないように、絶妙な距離感を保つ長年の「特訓」は、無駄にはならなかった。ちょっとした相手のしぐさ、顔色、言葉遣いで心理状態を感じ取れることがあり、特に仕事の場では妙手を打つことができます。こんな鍛え方をしてくれたおやじも今年87歳。かなり丸くなりました。でも、昔怒った時の仁王像のような姿が目に残り付いて、今でも怒りスイッチには触れないよう、心に刻んでいますよ。

(聞き手・中田絢子)